2026年度　大学院入試問題の出題意図

スポーツ・芸術文化共創専攻　9月11日（木）実施

教科・科目等名	健康スポーツ運動学
出題責任者氏名	

出題意図

1　発生運動学における「原志向位相」とは何かを、具体例を用いて説明してください。
意図：「原志向位相」は、発生運動学における運動習得段階の重要な考え方であり、運動形成位相の１つである。「原志向位相」は、人間が運動技術を習得していく段階において、やってみようと思えるなじみが形成される位相である。発生運動学理論の理解力および具体的に論述する能力を見る。

2　発生運動学における「動感」とは何かを、「生理学的運動感覚」との違いに着目して説明してください。
意図：生理学的な運動感覚（感覚受容器・神経・脳）と区別するため、発生運動学では動感という用語を用いる。動感は、人間が身体を動かす際に生じるコツやカンなどの動きの感じそのもののことを指す。他の研究領域と区別し、発生運動学理論の独自の考え方を具体的に論述する能力を見る。

模範解答

①

発生運動学における「原志向位相」とは、運動が成立する際にみられる最も根源的な志向の段階を指す。これは、まだ具体的な技術的操作に分化する以前に、身体がその運動になじみ、全体として「向かおうとする」契機が現れる位相である。

具体例として、子どものボール運動を挙げることができる。子どもはキャッチやスローといった技能を身につける前に、「ボールに触れたい」「やってみたい」「できそうだ」と感じて動き出す。この段階ではフォームや技術は定まっていないが、身体はすでにボールおよびボール運動に引き寄せられ、そこに応じた動きへと開かれている。

一方で、子どもがボールやボール運動に恐怖や嫌悪を抱いている場合には、この原志向位相は成立しない。その結果、技能習得へと移行する契機を得ることができない。このことから、技能指導に先立ち、子どもが自然に「やってみよう」と思えるようななじみを形成することが重要となる。

以上のように、原志向位相は具体的な技能の習得を支える前提的な位相であり、運動を可能にする根源的な志向として位置づけられる。

模範解答

②

発生運動学における「動感」とは、運動が成立する際に身体が経験する現象的な感覚を指す。つまり、コツやカンといった動きの感じそのものである。これは、動きが生じている最中に、身体が「どのように動いているか」を生き生きと感じ取る感覚であり、動きが生成される現場において成立するものである。

これに対して、生理学的運動感覚は、固有受容器や前庭器官など、身体内部の感覚器官によって受容される情報を意味する。つまり、筋や腱、関節などからの求心性情報を基盤として捉えられる感覚であり、神経生理学的に説明される領域に属する。

両者の違いは、運動をどのように把握するかにある。生理学的運動感覚が身体内部の受容器による情報処理として理解されるのに対し、発生運動学における「動感」は、身体が運動を営むその現場で発生する主観的・現象的な経験である。たとえば、子どもが跳び箱を跳ぶとき、筋肉や関節からの感覚は生理学的運動感覚に属するが、「跳び箱をしっかり押せた」や「跳び越えられそうだ」と感じる身体的な経験は「動感」に属する。

したがって、「動感」とは生理学的説明に還元できない、運動の現象的経験を捉えるための概念であり、発生運動学においては運動理解の基盤として位置づけられる。